ハレバレモンスターSTORY

第１章

第９話　私は嫌だ

『持っていこう』
彼女の提案に対して誰も反対はなかった。
むしろ誰もが”持って行かなきゃ”そんな想いを感じていたのかもしれない。
けれど対岸まで3分の１ほど進んだところで、僕らの目の前に一発目の花火が打ち上がった。

「始まった」
「このペースじゃ到底間に合わないぞ」
「・・・ごめん。」
『ハルネ？』
「やっぱりアタシがやりたいって言ったことは叶わないんだよ。今度はみんなも巻き込んじゃった」
『ハルネ、大丈夫だから。絶対打ち上げよう』
「とは言え単純に間に合わない、どうやるつもり？」
『方法なんてわかんない。それでも、こんなとこで諦めるなんて私は嫌だよ！』

嫌だよ・・か。
状況がどうとか、出来るかどうかじゃなくて。
自分が嫌・・・・・・・・・・諦めるのは僕も、嫌だな。
何かが吹っ切れた気がした。

「ヒタチくん！対岸まで全速力で走ったらどのくらいで行ける？」
「えっ・・全速だったら20分、いや15分あれば」
「テツくん、15分だと打ち上げスケジュール的にはどのあたり？」

「例年の打ち上げ数からすれば、僕らの持ってる木箱は20時スタートの３箱目だと思うから、準備含めたらギリギリ間に合うかってとこだと思う。」
「じゃあ、ヒタチくんは今から全速力で会場に向かって。事情を説明して僕たちの順番を最後に回してもらってほしい。花火はこっちでどうにか運ぶから」
「どうにかって、、いやっ任せろ！絶対に間に合わせて、説得してくる！」
「よし！僕らも急ごう。木箱のままじゃスピードが出ないからみんなのカバンにそれぞれ分けていこう。摩擦が危険だから上着か何かに包んで」

５人がそれぞれ花火の入ったカバンを抱えながら走る。
もう間も無くヒタチくんは着いた頃だろうか？
必死で走る僕たちの耳に花火とは違う轟音が響きわたった。
同時にポツポツと雨が体に当たる。
「こんな時に夕立？！」
『花火が濡れちゃう』
「みんなこれ使って。」
「ビニール袋⁉こんなにたくさん。」
「助かった！」
『さすがホーミン！最高！』

激しい雨の中、履いているスニーカーからは一歩足を前に出すたびにコポコポと変な音がなっている。
「これじゃ花火大会中止にならない？」
ハルネさんが不安げに口をひらく。
「一時中断はあっても、中止まではないと思う。あっちの方はもう晴れてきてるし」
テツくんが指差した方角はほんの少し残った茜色の空と澄み切った夜空が綺麗なグラデーションで星がいくつか瞬いている。
「それよりも増水した川の方を気をつけたほうがいいかも」
みんなに注意を促したその時、目の前から１台の車と助手席から顔を出したずぶ濡れのヒタチくんが大きく手を振っているのが見えた。

「おーーーーーい！！」